

氏名	間辺 利江
学位の種類	博士（ヒューマン・ケア科学）
学位記番号	博甲第 7923 号
学位授与年月	平成 28年 8月 31日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	Prognosis of patients with dementia complicated with pneumonia. (肺炎合併に伴う認知症患者の予後についての検討)

主査	筑波大学教授	医学博士	水上勝義
副査	筑波大学教授	博士（医学）	大久保一郎
副査	筑波大学教授	博士（医学）	新井哲明
副査	筑波大学助教	博士（ヒューマン・ケア科学）	岡本紀子

### 論文の内容の要旨

間辺利江氏の博士学位論文は、肺炎合併に伴う認知症患者の予後について検討したものである。その要旨は以下のとおりである。

#### （目的）

著者は、高齢化とともに認知症患者数が急増していること、肺炎は高齢者の死因の上位疾患であり、認知症は肺炎のリスクとされているが、その詳細は明らかではないこと、また認知症の予後調査のなかで神経病理学的確定診断のもと行われた研究はきわめて少ないことに着目し、確定診断された三大認知症（アルツハイマー病；AD、レビー小体型認知症；DLB、血管性認知症；VD）の合併症（とくに肺炎）と予後について詳細に検討し明らかにすることを目的として本研究を行った。

#### （対象と方法）

2005年1月から2014年12月までに愛知県豊橋市の老人病院に入院し、死亡退院した261例のうち、神経病理学的にAD、DLB、VDと確定診断された157例を対象とした。同院保管の病理解剖診断書、臨床経過記録書、診療録から情報を収集し、患者基本属性、臨床経過、基礎疾患、合併症（肺炎ほか）、薬物療法、入院日、死亡日、神経病理診断、脳重量、身体病理診断、死因（underlying cause of death, immediate cause of death）について調査した。

研究1では、AD、DLB、VDの臨床的背景ならびに死因を三群間比較した。研究2では、三大認知症の予後年数に関連するリスク要因を検討した。またAD、DLB、VDそれぞれに対して、肺炎合併の有無によ

## 審査様式 2 - 1

る予後年数の変化を検討した、研究 3 では、DLB 患者の肺炎合併例の予後を明らかにするために全経過年数に対するリスク因子を検討した。

### (結果)

著者は研究 1 から、VD は他の 2 疾患に比較して、死亡年齢が低く、男性に多く、高血圧、糖尿病の基礎疾患を有する割合が多いこと、入院中の肺炎の発症は DLB が 90% と最も多かったが、AD、VD とそれぞれ 89%、82% と高率で三大認知症間に有意差はないこと、そして DLB の肺炎による死亡は immediate cause of death が 52.4%、underlying cause of death 21.4% であり直接死因となる割合が多いことなどの結果を得た。また研究 2 では、認知症の全経過年数に対するリスク因子として、性別（男性）、発症年齢、糖尿病、VD が挙げられること、AD や VD は肺炎合併による予後年数の違いは見られなかったが、DLB は肺炎を合併しない例が 13 年であったのに対して合併例は 8 年と著明に短縮することを明らかにした。また研究 3 では、DLB の肺炎合併例における認知症発症からの生存期間に影響する因子は、脳梗塞、下肢筋力低下、性別（男性）、高齢発症であることを明らかにした。

### (考察)

著者は、三大認知症はいずれも肺炎の合併率が高いことを示し、ターミナルステージの DLB 患者では、自律神経機能障害に伴う呼吸機能の低下が AD や VD より強く、肺炎が直接死亡につながりやすいことを考察した。また VD のリスクである脳梗塞の発症予防と予後管理、糖尿病の管理の強化などが認知症患者の延命に影響すること、肺炎を合併した DLB 患者では、脳梗塞の既往、下肢の衰え、呼吸機能の低下、自律神経機能障害に伴う換気応答障害が死亡リスクを高めることから、これらの管理強化が延命につながることを指摘した。

## 審査の結果の要旨

### (批評)

本研究は、神経病理学的に確定診断された三大認知症患者の予後に関連する因子を明らかにした点、合併症や死因について認知症間の違いを明らかにした点、また肺炎の合併が多いことは報告されていたが病態が明らかではなかった DLB について、肺炎合併例の予後に関連する因子を明らかにした点で意義がある。本研究の結果から、VD は、AD や DLB に比して死亡までの期間が短いこと、脳血管障害と関連する基礎疾患の管理が認知症の予後に重要なことを示した。また DLB は肺炎が直接死因となりやすく、肺炎合併が予後年数を著明に短縮することから、肺炎予防が DLB の予後向上に必須なことを示した。さらに脳梗塞の予防、糖尿病の管理、四肢筋力の衰えの防止が DLB の肺炎合併例の予後向上に重要なことを明らかにした。

以上、現代社会において重要な課題である認知症患者の予後対策の一助となり得る研究成果を報告した本研究は、研究意義、独創性、成果などの点からきわめて有意義と評価され、博士論文としての水準に達していると判断される。

平成 28 年 6 月 8 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（ヒューマン・ケア科学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。